

日本学士院賞 受賞者

三佐川 亮 宏  
みさがわ あきひろ



専攻学科学目 ドイツ中世史

生年 昭和三六年 二月  
略歴 昭和五八年 三月  
同 六一年 三月  
同 六二年一〇月  
平成 三年 四月  
同 六年 四月  
同 一一年 四月  
同 一九年 四月  
同 二一年 四月  
同 二三年 三月  
同 二三年 九月  
同 二四年 一月

北海道大学文学部史学科卒業

北海道大学大学院文学研究科修士課程修了

西ドイツ・ボン大学留学（平成二年三月まで）

北海道大学文学部助手

東海大学文学部専任講師

東海大学文学部助教授

東海大学文学部准教授

東海大学文学部教授（現在に至る）

博士（文学）

ウィーン大学オーストリア史研究所客員研究員（平成二四年一月まで）

ドイツ・ベルリン・フンボルト大学比較中世史研究所客員研究員

（平成二四年三月まで）

博士（文学）三佐川亮宏氏の『ドイツ史  
の始まり―中世ローマ帝国とドイツ人の  
エトノス生成―』に対する授賞審査要旨

本書『ドイツ史の始まり』（創文社、二〇一三年二月）は、副題「中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成」が示すように、ドイツ人という民族集団（エトノス）が自らを「ドイツの民」と認識し、また異邦の民によってもそのように見なされ始めたのは、歴史のどの時点であったのかを、年代記、詩作品、国王文書、教皇文書などの多様な類型の史料の証言を、丹念に突き合わせ、あるいは推論の糸をたぐり、あるいは統合を重ねながら、ひとつの説得的な結論を提示するのに成功した優れた業績である。

本書は序章と終章を含め全体で二三章、三部構成をなしている。第一部「政治Ⅱ国制史的アプローチによる「ドイツ史の始まり」」において、まず著者はドイツ人問題をエトノス論の視点から考察しようとするとき留意すべき様々の基本的概念の、ドイツ中世史学界における革新の様相を紹介している。その代表格は一九七〇年代までの学界の通念を書き替えたK・F・ヴェルナーの所説である。

その骨格は、カロリング国家において一見すると部族の分布に対応する形で創設された行政区画としての大公領こそが、その枠組を基礎にして各民族集団が生成されて行く母体となったものである。ドイツ人エトノスの生成過程は、大公領を枠組としたこれら新たにゲンス化された集団の成員が、自らを「*teutonic*」として共同意識を結晶化させる過程のことである。著者は「ドイツ史の始まり」の始点を、八四三年のヴェルダン条約の時期に設定する。

そのうち分析の基軸はドイツ語を意味する *lingua teutonica*、これを使用するドイツ人 *teutonic* の概念がいかに成熟し、社会に浸透していったかを一〇、一一世紀の歴史記述や文書のなかに探ることにおかれる。これに関連して著者が注意を喚起するのは *lingua theodisca* なる言葉の意味論的展開である。八世紀後半の記録にも散見されるが、その意味するところは「フォルクの言葉」であり、いまだ「ドイツ語」としての *lingua teutonici* に結晶化する以前の状態を指していた。オットー一世のローマでの皇帝戴冠までのザクセン朝の支配体制に、著者は「フランクⅡザクセン王国」の名を冠し、ドイツ王国はこの段階でも未成であると考えるのである。

第二部「ドイツ人」と「ドイツ人の王国」は、オットー一世からオットー三世の治世にかけての政治史的過程の考察と合わせて、それまで全く未知の要素であった「ドイツ」という名辞が出現する

プロセスが検討の焦点となる。

すなわちクレモナ司教リウトブランドが、九六五年に初めて皇帝文書において「ドイツ人」の意味で *teutonic* を用いた証書を起草した。ランゴバルド・イタリアから他者認識の表現として、アルプス以北のオットー支配下の民を指称する言葉 *teutonic* が発せられ、やがてアルプスを越えて緩やかに北に浸透することになる。だが他方でアルプス以北でも、「ドイツ人」観念の生成は、潜勢的要素として静かに醗酵しつつあった。そのことを示すのはザクセン人修道士クヴェーアフルトのブルーノが書き残した作品である。ブルーノの言説を分析する部分は、本書中の白眉と云える。ザクセン人ブルーノをして「*teutonic*」ドイツ人を焦点化せしめたのは、彼のイタリア体験であったと著者は云う。オットー一世は、カロリング朝の王たちのようにローマ皇帝として戴冠された。カロリング朝の王たちがイタリアをあくまで「下王国」と位置づけたのと異なり、オットー諸王はアルプス南北の政治的統合を目指したのである。それはオットー三世の時代に著しく顕著となる。皇帝が「南」の地から「北」を遠隔操作した結果、アルプスを挟む「北」＝「中心」と、「南」＝「周縁」の従来の力関係はここに逆転し、今度は「ローマ帝国」が「フランク人の王国」をその内部に吸収・融解する様相を呈したのである。こうした支配実践・統治構造の短期間での劇的とも言

べき変化は、都市ローマと教皇領に限定されていたローカルな「ローマ帝国」概念の拡大を促す方向へ作用し、他方「帝国の諸分国構造」を克服することなく捻れた形で展開された政策は、期せずしてもう一つの落とし子を齎した。「ドイツ人」なる名辞の受容がそれである。

第三部「ローマ帝国を担うドイツ人」では、このように主客転倒したとも形容しうるオットー朝の帝権的王権政治の力点の変化が、王権を初めとする聖俗の支配層の意識にどのような影響をもたらしたかが探究される。大きな転換点となつたのがローマ教皇権力とドイツ王権が対峙した叙任権闘争であった。教皇グレゴリウス七世が皇帝ハインリヒ四世と対決した初期の局面の頃に、ケルンの逸名修道士が中高ドイツ語で綴った『アンノの歌』には、ローマ人カエサルと協同する「ドイツの人々 *diutisch iuui*」、「ドイツの男たち *diutisch man*」と形容される人々が登場する。著者によればこれは元来起源説話を持たなかつた「ドイツ人」が、共属意識を醸成し来つた発露であり、エトノス生成の一つのメルクマールとみなしうる。叙任権闘争の決着をみたヴォルムス協約（一一二二年）の教皇側の文書において、これまでドイツ歴代の諸王が一貫して忌避してきた「ドイツ王国 *regnum Teutonicum*」の名辞が用いられたのであ

る。

だがその後のドイツ王権は引き続き「ローマ人の王 *rex Romanorum*」を称号として名乗り続けたばかりではなく、一一五七年にフリードリヒ・バルバロッサの宮廷書記局が国名として使い始めた「神聖ローマ帝国 *sacrum imperium Romanum*」を、一二五四年以後定着させるにいたる。ドイツ王権のかくも強力な「ローマ」への執着の理由を、自らがドイツ王権の血脈に連なるフライジング司教オットーの著作『年代記』(一二世紀中葉)が解き明かしてくれる。彼は人間の歴史はバビロニア、ペルシア、マケドニア、ローマの四つの帝国を閲し終末を迎えるという、周知の「四世界帝国論」を論じ、帝権移転論の枠組の中でカール大帝やオットー一世らをローマ皇帝権の担い手として位置づけるのである。「ドイツ人」が、「ドイツ人のローマ帝国」という一言に集約される「国家」と「民族」の関係性において、ついにその歴史的理論化の段階にまで達し、そうした意味で、著者は「ドイツ史の始まり」の終点をフライジング司教による帝権移転論の時期に措定するのである。八四三年に開始した「始まり」は、約三世紀の時を経てここにその終局を見たのである。

主題の根本性、史料と文献渉猟の網羅性、徹底して考え抜いた書き手だけがもつ日本語の品格、多層的でありながら堅固な論理展開

など、本書は稀な完成度を示す著作である。本書によって我が国のドイツ中世史学は、さらに新しい段階に引き上げられたと評されよう。